Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>種村真吉著「日本の室内」 : 日本インテリアデザインの体系
Author(s)	野口, 茂
Citation	デザイン理論. 1977, 16, p. 113-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53698
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

種村真吉著

「日本の室内」

——日本インテリアデザインの大系——

戦後，日本人の生活は急速に洋風化に斜傾しつつある。日常生活の場である住宅のインテリア空間も，その短期間の生活様式の変化に対応しかねて，混迷・模索の状況が現代の様相であろう。それは大きい観点よりすれば，住宅全般の政策にかゝわる問題であり，小さくは居住者個々の住意識・生活姿勢・価値感等の問題といえるものである。

今日，一般の住宅は住居面積が狭小を余儀なくされているに係わらず，居住者はより快適な生活を望む。例えば住空間の分化・プライバシーの確保・設備機器や生活用具の充実・生活の多様化への対応など，それらの要求は必然的に住空間を合理化・効率化・システム化することに連らなり，その点科学的な合理思想の発達した欧米建築に学ぶ処は多い。

従って生活に合理性を導入することは，決して忌むべきことでなく，却ってその長所を積極的に摂り入れ消化すべきである。しかし，要はその〈摂り入れ方〉の問題である。洋風生活様式の表面的な目新らしさや，一時的な便利さ，また日本の伝統にない異質の美くしさに捉われ過ぎて，安易な迎合や無批判な受け入れは，却って生活を混乱に陥し入れるだけでなく，日本の誇り得る住文化を無定見に崩壊に導くものであるといえよう。

それは言う迄もないことながら欧米の生活様式やインテリアは，日本と全く異った環境・歴史・民族等を条件として成立し発展してきたものである。従がってその取捨選択にあたっては，再解釈の必要があろう。

一方，これらの諸問題の処理解決を企図した著書や提案が多く発表されている。新らしい計画論・技術論・工法等，また居住者の興味や関心をそゝるような過度の商業主義的な刊行物まで，その種類は多く一種のブーム的現象を呈している。

本著は日本インテリアの原論的な内容を持つもので，現今の混迷的な諸状況に対し，〈日本人の生活と住居〉の関係を明確にすると共に，見直し再確認することにより，自主性を喚起して今後の方向を示唆しようとするものである。その点一種の提案的意図を持つものであるが，それよりも日本のインテリア成立の原点に立ち戻ってその本質を究明し，他地域との様相を対照考察することにより，より明確な自主性の確立を目指そうとしている。

殊に著者は日本の特殊な風土と日本人の生活に，その論述の大半を費やし，豊富な資料

を引用して論証している。また著者が冒頭で述べているように，「室内の問題はそこに住む人間の探究・把握なくしては適切な解決はあり得ない」としているように，その人間研究についての考察は，興味深いものがある。

次に本著の構成の概要を紹介すると，6章よりなっており，1. 総論，2. 風土的必然性について，3. 歴史的必然性について，4. 日本人の生活，5. 日本の室内，6. 日本の室内の将来への展望及びその具体的対策，が挙げられている。その内前述のように，2（風土的必然性）4（日本人の生活）については，それぞれ有機的な関連性を持たせながら分類・分析し，特に重点を置いているようである。

例えば2（風土的必然性について）の項については，温湿度・風速風向・降雨量・太陽光線の強さ・地震・台風など。同室内の関係については，場所・四季の変化・遮光・結露・防湿防水・地震と間口等，何れも日本の風土の特殊な環境がもたらす生活への影響，また長い歴史の中で，必然性に対応するための生活技術・物心両面の合理性等について解明している。

また，4（日本人の生活）の項については，その特徴として，無執着性・情緒性・開放性・潔癖性・矮小性・軽量性・規格性・簡素性・融通性・低視線性等を挙げ，日本人の特性について綿密な考察を進めている。その他，政治・経済・科学・技術・習慣など関係すると思われる諸要因をあげ，広い視野より住宅と人間生活の関係について論及している。

次いでそれらの中から，日本の将来の住宅について，「変化しないもの」と「変化するもの」に区分し，更に将来とも「変化させねばならないもの」と「変化させてはならないもの」に論理的に整理し纏めている。

以上が前半部であり，後半部（5・6）は前半部の論述を骨子として，現在の室内の必要条件・材料・技術・日本人の感覚及び造形的傾向などにふれ，将来の展望について著者の所見を述べている。そして終章の末尾に「これらを具体的形態にするのは，各デザイナーの仕事である。デザイナーとして心すべきことは，1）奇を衒はないこと。2）現状をよく見つめいかに住みよい家を造るべきか，それには形而下的かつ形而上的機能に徹することである。ということは一言でいうと，当りまえのことを当りまえにやることであるが，これは極めて難かしいことである」と結んでいる。

以上その概要を紹介したが，飜って現代の一般住宅並びにインテリアを観るとき，合理化・近代化の趨勢のもとに，工業化・システム化・部品化の傾向が著るしい。またそれらを複合化・装置化することによって，インテリアの良質化が考えられている。そしてこれら部品の選択・コーデネイトによって個性化をはかろうとするのが現代の思考である。それらの問題点については，基本的には本著の前半部の論理がその指針になるであろうが，

後半部に於て余り論及されていないようである。

最後に著者は長年造船所に於て，船舶艤装設計に従事され，その途のベテランである。船舶の艤装は一般住宅と異り，特殊な条件とメカニズムの中にあって，そのデザインは常に科学的合理性に徹することが要求され，感覚上の安易な妥協は許されない。若し許されるとしても，それは機能を疎外せない範中に限られる。その他船舶という目的のため陸上建築物に見られない多くの条件が付与される。従ってその計画にあたっては，それらの諸条件を分析し総合的に組みたて明確な判断が必要である。著者の職域に於ける長年の体験と，こゝに見られる半生を通じての住宅への研究は，在来の〈インテリア論〉に見られないユニークなアプローチを示し，その展開と体系づけは本著をより特色あるものにしている。

著書はまた先に「船舶の室内」（S. 39. 金原出版社）があり，民間職業人としては珍らしく篤学の士である。本著はその論述・内容等共鳴する点も多く，また労作でもあり，日本図書館協会の選定図書に指定されているが，評者として敬意を払うと共に一読をすゝめたい著書である。

（京都工芸繊維大学　野口　茂）